

---

mad-dog

世纪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

mad · dog

### 【著者名】

世杞

N1038D

### 【あらすじ】

容姿端麗、頭脳明晰。どこをとっても完璧な素敵男子に育てられた夜宮炯16歳。（でも料理はできません。）俺は若干12歳にして、その世界に絶望し終わりを告げることを決めた。

1.

世界なんか大嫌いだ。

最も、今言つた世界というのは地球規模で言つ世界なんかではなく、俺の今現在生きているとてつもなく狭く、下らない世界だということを、最初にわかつていてもらいたい。

俺の家には金がある。

とてつもなく莫大な財産がある。

父親が大手不動産業者の社長で、母親が華道の家元の三女という、ものすごくありきたりな、いわば金持ち夫婦の間に俺は不本意にも生まれてしまった。

そしてすぐすぐと16歳の立派な高校生まで育つた俺は、容姿端麗、頭脳明晰な少女漫画雑誌を開けば絶対何処かにいそうなアイドル系、女子の憧れ、少女漫画のヒロインの彼氏待遇的男子になつていた。

小さい頃から勉強やら習い事やら、両親が俺に求めた教養を天性の才能と努力でこなし続け、会社のパーティだ、社交界だ、どこにだって連れ出され、褒め称えられ、賞賛を浴びまくつた。

ピュアだった小学校低学年の頃はそれが嬉しくてしょうがなくて、人に褒めてもらうのが快感だった。

褒められるためなら何でもやつた。ありとあらゆる教養を身につけた。

けれど。

おかしなことに気づき始めたのは、小学校6年の、冬。

12歳の誕生日だった。

自宅の豪邸での馬鹿じやねーかと思ひくらいの盛大なパーティ。

12歳の子供の日で見てもこれは金がかかっているのだと理解できた。

だってケーキがウエディングケーキ負けのおよそ30段の特大ケーキだった。だってたかが12歳の餓鬼の誕生日にモーリング娘が来ていた。（興味がなかつたので顔や名前は全く思い出せないが）。飛び交う祝福の言葉。それに混じつて俺の自慢話。

祝福は、客。自慢は、母。

父の姿はここにはない。

母の口からは俺と、家の自慢話ばかり。

客からは社交辞令。

父は仕事。

母は話す。

客は聞く。

父は会社。

母は話す。

客は褒める。

父は家の主。

母は話した。

客は聞いた。

父は、いなかつた。

母は止まらない。

客の反応はパターン化。

父はいない。

俺は知らない。

そして俺は初めて気づく。

12年同じことを続けてやつと気づく。

あ、

ここ、俺はいなかつた。

この場所にはいた。しかも主役だった。でも、名前ばかりの主役だった。本当に、本物のお飾りだった。だから俺の名前はいたるところによく聞こえた。

けれど、

話すのは母。聞くのは寄。父は仕事。

俺は、ただの話のネタ。

俺は母の道具だった。俺は母の道具でしかなかつた。俺は母の金もうけの道具だった。

俺の今までの人生の全てが、こいつらのものだつた。  
俺の名前も、成績も、特技も趣味も、容姿さえも。

全ては、母のモノだつた。

ああそつか。

悟つた瞬間に世界は変る。

全てが偽善。全てが偽者。

今の俺の世界に本物は俺だけだった。

俺の周りは、大層、吐き気がするほど、汚かった。

気づいた俺は、歪んでいく。

パーティは続く。俺は停止。

アイドルが歌を歌う。

平和や、美しい恋愛の歌を。

全部全部偽者だろう飾り立てられた言葉は、酷く軽々しかった。

どうせ思つてもいなうことなのに、引きついた笑顔で、ゴクゴクウナマ。

時間は進む。  
俺は止まる。  
誰も話しかけないで。  
どうせ全部偽者だろ。

ああ、触んじやねえよ母親。  
ババア

穢れる。

言つておぐが、この時俺は、表面上まだあどけない12歳の餓鬼だ  
つた。

word end (後書き)

\*

こんな感じで始まりを迎えました。

mad - do go

英語圏のスラングで睨みつかると言う意味らしい。・・・。(自信なし)

ギャグ風味に、ある男の出来こと母親とのバトルを描いていきたい  
と思いますので、どうかお付き合ってくださいませ。

世纪

2 .

俺が中学を卒業する頃。

父親は相変わらず家にはいなくて、母親はホスト狂いになつた。毎晩毎晩、大金を振りまいては、たまに帰つてくる糞ババアに、俺はとうとう。

限界点を突破した。

16の誕生日。

俺は決意する。

こんな家、出てつてやる。

決行はPM12時。

バタバタバタ。

「お待ちください炯様！！美和様が知つたらなんと言われるか・・・！」

「うつせ、死ね。」

家付きの執事が煩く喚いた。何が美和様だ。顔に似合わねえ名前しやがつて。

今は母の名前などに構つてゐるほど暇ではないのだが、長年の憎しみメーターが頂点に達してゐるので、その美和という単語一つにも舌打ちをしたくなつてしまふ。

広い家だ。運動不足の中年執事を撒くのは容易い。

と、いうか、自分でかけた廊下のワックスで滑つてこけていれば世話はない。

凄い音と悲鳴が聞こえたが死んじやいないだろう。死んだとしてそれは決して俺のせいではない。

・・・多分。

勢いよく玄関の扉を開き外にでる。

また無駄に広い庭を通り抜け家の敷地から一歩踏み出し振り返つた。

あの日から、見るだけで吐き氣を催しそうだった。

見栄の塊のような豪邸。

趣味の悪い金箔の門。

一度と帰つてくるかこんな家。

今までだつて此処を通るのが恥ずかしくて裏門から出入りしていた。

今日で最後。見納め。

今日そこを通つたのは、一回通つてみたかったからとかではなく、決してそんな好奇心ではなく、最後だから。もう一度と帰つてこないと決めたから。

それだけだ。

本当に。

いや、本当にそれだけだよ？

\* \* \*

俺はババアが通うホストクラブの前で待ち伏せた。

その間2、3度知らない女の人とか危ないオヤジに声を掛けられたりしたけれどそれを全てウザイと一刀両断して追い払う。それどころじゃない。俺のこれら的人生がかかつてんだよ。下等人間ども。

寒さに負けず待ち続けてきつかり2時間。

男共をはべらせ出てきたババアの金のどつき入り入ったハンドバックを、ひつたくりよろしく奪い取り、俺は走った。  
サングラスに、金髪のウィッグ。一瞬じゃ、自分の息子だとは判断できないだろう。  
なぜなら、あの女は俺にそこまで愛はない。

なんたつて、先日久々に家に帰ってきたあの女は、俺の名前を呼ぶのに1分弱かかっていたから。

それから俺は、

逃げて、逃げて。逃げまくつた。  
追われているかもわからなかつたが、  
全力疾走で走り続けて。

そして、今に至る。

繁華街の裏路地に入り込んで、息を整える。  
バックの中には、30枚はくだらない諭吉と、ゴールドカードが入  
つていた。

これで、暫くは一人で生活できる。

俺は息を吐く。

安堵の溜息を。

これで、やつと。

家出、成立。

ずるずると壁伝いに座り込む。

ちひつと、・・・疲れた。

このまま、此処で眠つてしまおうか。

考えるのが面倒くさくなつてきた、その時。

「・・・あ、いた。」

突然コンクリートの壁に響いた声。

暗くて顔はよく見えないけれど、長めの髪と、色素の薄い目だけが  
やけに目立つた。

俺は威嚇するよつにバックを胸に抱え後退する。

「誰つ・・・!」

誰だ　　。言おうとした瞬間に鳩尾に響いた衝撃。

痛い、と思う間もなく、情けないことには俺は、そこで意識をなくしてしまった。

家出決行から3時間。

早くも、そして愚かにも俺の家出は、終わりを迎えて・・・・。  
・・・・。いいわけあるか。冗談じゃねえ。  
でも、この状況でそんなことを思つてみても、空しいだけだろうが。

ああ、やっぱ。面倒くさい。

モヒーフヌーディアウト。

ま、とくナビ、ゲームオーバーにはまだ早いだろ？

carry out (後書き)

\*

家出編です。

炯君は頭は良いのに何処か抜けているので全く計画性がありません。  
何故わざわざ誕生日まで待ったのかといつと、16歳以上の方がなんとなく色々できそうだから（偏見）となんか格好よかつたから。  
所詮お坊ちゃん。

3.

朝定番の、鳥の鳴く声が微かに耳に届く。

カーテンの隙間から入る微弱な日光に顔を照らされ目が覚める。

体、だりい。

上半身を起こすのも億劫で頭だけを巡らせ辺りを見回す。

・・・広い部屋。

高級そうなカーテンに、しっかりとワックスのかかった傷一つないフローリングの床。

そこらの安いアパルトマンじゃないことは嫌でもわかる。

・・・マンション?

うわー高そー。

感慨のない感想を出してから、大事なことにやつと気づいた。

・・・・・ちょっと待て。

此処はどこだ。

俺は・・・俺の名前は、・・・・・うん、ちゃんと夜富炯。よかつた。記憶喪失になつたわけじゃないらしい。

だが、こんな部屋は俺の記憶にはないし、俺の意識は昨夜の路地裏で消えている。

つまり、此処は知らない誰かの家で、俺はそこに連れてこられて寝かされている。

・・・普通に考えてそれはヤバイだろ？

上半身を起き上がらせ、よべ部屋の中を見てみる。

これまた高そうなテーブルや、棚に乗った見たことの無い調度品が、俺をよそ者だとこいつことを暗示させる。

完璧に、俺はこんなところは知らない。

「・・・あーもー、めんどくせえ。」

誰かに拉致られる覚えはねえぞ。

頭を搔いて溜息を吐くと不意にドアが開いた。

静かな部屋に、ドアが開く音は立つて聞こえる。

「 つ・・・・・・・」

「・・・・あ、起きてる。」

入ってきた男・・・え、いや男・・・？

・・・性別不明の美形。・・・声的に多分男は、警戒している俺の反応は総無視で、ベットの脇に腰掛けた。

「気分どう？具合悪かつたりする？」

「・・・いや、・・・別に。」

見た目、20代前半。肩下くらいまである銀髪を無造作に垂らしている。顔はありえないくらい整っていて、目の色が若干薄い。でも一応日本人の、多分男だとは思う。

そのふわりと微笑んで、顔を覗き込んでくる仕草に、自然と俺は神经が緩み素直に答えた。

「ならよかつた。全然起きないし、ちょっとあぶないかなーとも思つたんだけど。」

「・・・あのさあ。」

此処はどこで、アンタは誰で、聞きたい」とはとりあえず色々あつたが、まず先に確認しておかなければならぬ。もし俺の見解が外れていたら失礼以外の何者でもないからだ。

「何。」

「・・・あんた、おとこ・・・？」

銀髪美人は一瞬目を見開いて、だがすぐにまたフツと微笑んで、口を開いた。

「・・・文句あるか。家出少年。」

口調が若干違つて聞こえるのは氣のせいでは、きっとない。

「・・・！」

責めでいく俺に視線を合わせて、にっこりと笑つたまま男は続ける。

「・・・なんで、つて？」

「・・・あ、・・・。」

声に出せなかつた俺の問いかけを、代わつて補足される。

「職業柄、俺一度見た顔はそう簡単に忘れねえから。……な、夜

富息子？」

ばれてる。俺が美和の息子だつて完璧ばれてる。  
でも何で。

何で知つてる。

俺のこと、何で息子だつて、

知つてるんだよこいつは。

頭の中でもとまらない思考を必死に束ねる俺に、正体不明の美人はまたもや口を開く。

「・・・あれ、思い出せねえ？ 頑張れよ、お前頭良いんだろ？ が。

」

「はー？」

「アンタのママこは、毎口日本当にいじ艶膚にしてもらつてるんだけどなあ？」

意味深なセリフに、俺は記憶の引き出しを片つ端からじじ開ける。  
記憶力は、良いほうだ。

「え、と・・・・・・・・・・、つあ！」

ああ、思い出した。前に一度あの女に連れて行かれたホストクラブ。  
そこで美和が指名していた・・・。

この男。

「アンタつ。あのババアが指名してたつ・・・・・！」

「そう。思い出してくれてありがとう。夜宮・・・・・炯君・・・・？」

にこりと、男が楽しそうに笑う。

そしてはい、とマグカップを渡された。中には、ココア。

暗に餓鬼扱いされているような気がしたが、黙つて受け取つておく。

「・・・アンタ、一回行つたきりなのに、俺の名前と顔覚えてんの？」

「まあね。一応これでもノ。・イだし?」

「・・・知つてゐる。」

うちのババアは、ホストクラブに行つても、絶対ノ。・イしか指名しない。

「昨夜、美和さんがひつたくりにあつてさあ、その後すぐ、家から息子がいなくなつたつて携帯に電話があつたらしくて。んで、見つけたら保護＆連絡お願ひつて言われてたから、一応連れてきたんだけど。まあ、あの人馬鹿だからひつたくりと家出息子が同一人物だつては気付いてないみたいだし。よかつたね。」

「・・・あの糞ババア。」

氣づかれてないことに安堵する反面、やつかいなことを言いふらしてくれたババアに舌打ちをする。

「お前、一応ママなんだろ?」

「ママね、うんママ。息子の名前も忘れちやつたママ。」

ふう、と息を吐いて答える。

俺の家出劇は終わりを迎えるらしい。

「・・・ふうん。なあ、何で家出なんかしたの。」

「・・・自分が息子だつたらつて考えてみるよ。観察力が鋭いホストさん。」

自嘲的な笑みを浮かべて睨みつけてやる。

「勝手なことしやがつて、人助けでもしたつもりか?」

「だつてあんなとこで寝てたらどのみち捕まんぢろうがお前。」

「・・・うるせえよ。どうなろうが俺の勝手だ。」

「・・・お金持ちお坊ちゃんから前科持ちのホームレスに降格つて  
か？そんなんお前のプライドが許さねんじゃねえの？」

「・・・うつむけ。」

「世間知らずのお坊ちゃんが余裕で暮らしていくの、此処らへ  
んは甘くねえと思つんだけ。」

「うつせえよ！…！」

的確な現実論を次々と指摘され俺は耐え切れず怒鳴る。  
俯いて、高そうなシーツを震える手で力いっぱい握つて、歯を食い  
しばつて。

そんなこと、自分でよくわかつてんだよ。畜生。

ああムカつく。

苦し紛れに一言。声が震えるのが煩わしい。

「・・・あんたウザイ。」

「ありがとー。」

「褒めてねえよ！…！」

「・・・知ってる。」

くすりと呆れたような音が落ちてきて、頭を撫でられた。  
初めての感触。

今まで散々褒められ、喜ばれ、賞賛を浴びまくつた俺だが、頭を撫  
でられたことなんて、なかつた。

そしてまた新たなかいつ等に欠落した愛情に気づく。  
忌々しい。

少しの沈黙。そして。

「・・・美和さんには、連絡していない。

その言葉に俺はぱつと顔を上げた。

・・・今、何て言った?

「お前が此処にいること、俺まだ誰にも言つてねえの。」  
どうする?

綺麗な笑顔でそう問われる。

絶対、もうチクられてると思ったのに。

「どうするつて・・・」

「俺ん家、貸してやるよ。面白そだから匿つてやらない事もない  
ぜ?」

俺優しい人間だからー。

そう言う男に、優しい人間はこんな風に精神的に高校生を虐めたり  
しないとだろうが。と心中でひつそりと突っ込みを入れる。

「暫くいれば?嫌いなんだろ?あのババア。」

あ、今こいつ客に向かつてババアって言つた。  
店で見た時と大分印象が違うのは、多分こっちが素だからだろう。  
徐々にこいつの性格が見えてきた気がした。

趣味の悪い遊びに付き合おうとしている、暇人。

「・・・俺本気なんだけど。」

「知つてる。だからこそ、だろ?」

俺、あの人大つつつ嫌い丶

綺麗な笑顔で言つてみせた男の問題発言は俺の迷いを有難くも綺麗  
さっぱり消してくれた。

そう、それこそが最大の理由。

そこでやつと視線を合わせた俺に美人は気がついて、二つと笑う。

「家出、続行？」

「もちろん。」

そして俺の家出、もとい西候生活が幕を開けた。

## resumption (後書き)

\*

やつと話が始まった感じ。  
理不尽ホストと、家出少年のこれから的生活はきっと平凡なもので  
はないことを祈つて。

The true character (前書き)

ホストの正体が暴けてきた。

「・・・けい。・・・炯！」

聞こえない。俺は何も聞こえない。

俺は今眠っているのであって、しかもノンレム睡眠で熟睡中。よっぽどのことじやなければ、誰が土曜の休日の朝の7時なんていふざけた時間に大人しく目え覚ましてやるもんか。

頭からすっぽりと毛布をかぶり狸寝入り続行。

今は冬だし、暖房は良い具合に部屋を暖めて気持ちよさすぎる。もつたいなさすぎ。

なんと言われようと、絶対俺はこの空間を死守しなければならない。

「・・・・・・けい・・・・？」

・・・嗚呼、俺を呼ぶ声が疑問形になつてきた。しかもさつきより大人しい。

雪妃と出会い、そして居候生活を始めて3日。そろそろこいつの性格やら行動がわかつてきた。

これは、ちょっと怒り始めている。

「・・・けーーーーん？」

俺を拾つた美形ホスト。

名前は季篠雪妃。（きとう ゆきひ）

男にしては珍しい、そして凄い名前だとは思つたが、その見た目が名前負けしていながらも凄い。

名前を聞いて、漢字を知つて、そしてその名前になんとなく納得してしまうのは俺だけではなはずだ。

だが、雪妃は見た目に反してかなりの自己中、天上天下唯我独尊な

傍若無人男であつた。

気に食わないことがあれば直ぐにそれに嫌悪を示し不機嫌になる。自分が気に入るまで妥協はしないし邪魔をしようものなら徹底的に排除される。

かなりの毒舌家で手が出るのも早く、頭も良いので抵抗のしようがないといつ。ある意味、最強。

今まで色んな人間と交流してきた俺だってこんな俺様人間見たことなかつた。

・・・もちろん、それは素の雪妃での話だが。

こいつは店に出ると180度。まだ短い付き合いの俺だが、あながち間違つてもいいだろ。完璧に性格が変る。

その瞬間は、何度見たって慣れるもんじやない。

ブルリと身震いし、毛布に包まれぬくぬくと雪妃の生態研究をしていた俺の上から舌打ちが聞こえる。

あ、ヤバイ。

そう直感した時には遅かった。

ドスつ。

鈍い音が腹に響く。

ああ、暫く静かだつたから忘れていた。自分の無防備さに雪妃を相手にしては遅すぎる後悔をする。

それにしたつて毛布越しなのにこの痛さは何だ。

目いっぱい足を振り上げそれを俺の腹めがけて踏み潰さんばかりの勢いでそのまま降ろしただけの至つてシンプルな攻撃法だが効果は絶大だつた。

あまりの痛さに俺はベットから転がり落ち、床暖の聞いたフローリングの上に蹲る。

「・・・・・ゲホッ！！・・・うえ、 かはつ・・・！」

「おはよう炯君。仕事明けで不機嫌極まりない俺を前に狸寝入り決め込むなんて度胸あんなあ。嫌がらせかコラ。お前ん家の糞ババアのせいにこつちはくたくたなんだつーのー。」

「う、・・・・・つと待て・・・・やつあたりかよテメエ！-！」

蹲つたまま俺は悲鳴を上げる。

ちょ、これ絶対癌になるつて。今まで瘡蓋一つ作つたことない俺の体に初青癌できるつて！！

「それもまあちよつとあつたけどー？でも俺がそんなことに全力で無駄な体力使うわけねえだろ。眠いの。出てつて。」

そりや そうだ。お前はそつこつ意味のないしかも自分に全く利益がない事大っ嫌いだもんなー。

くつそあーもう寝たきや寝るよ。あのババアの相手を一晩中してたのかと思えば俺だつて同情したくなる。昨夜もお疲れ様。そしてまた今夜も頑張つて優雅に猫かぶつてきてください。

・・・でもちよつと待て。今のセリフを聞いて突つ込まなきやいけなさそうなところが一つだけあるんだが？

「・・・なんで俺の部屋で寝よつとしてんの。」

風呂上りなのかまだ僅かに湿つた髪はそのままに、（それで何故あんなさうりのアジョスのよつな輝きを保つたまゝのか全くわからないが。）毛布にもぐりこむ雪妃に一応聞いてみる。

「・・・・・えー・・・? だつて俺の部屋暖房ついてねえんだもん。」

だもんじやねえよだもんじや。良い年こいてその言葉使ひは何なんだ。

「何が悲しくて男にベット貸さなきやこけねえんだよ。」

溜息混じりにそう言ひつと、雪妃はむくつと上半身だけを静かにベットから持ち上げた。

・・・あれ、なんか、こころなしか、雪妃さん目が据わつてしません？  
・・・・・もしかしてまだご機嫌斜めかこの俺様ホストは。

はあ、といかにも面倒くさそうに息を吐き雪妃は髪を搔き上げる。

「・・・あのさあ。タベ美和さんが店來たつつたよな？」

「・・・それが、何。」

「つちの息子がいなくなつたつてキレつてさあ、不機嫌絶頂でも一やりたい放題。」

そこで言葉を区切り雪妃はすうと息を吸つた。

あのババア店に来た時から不機嫌でグラス置く時にうつかりちよつと音立てたヘルプに舌打ちして頭からシャンパンパンぶっかけるわその酒まみれのそいつの頭にライターで火つけようとするわついでにそいつはマジ泣きしだすしああ当たり前だけ止めたぜ？止めたけどその美和を止めた通りがかりのマネージャーは暴れた美和に眼鏡落とされて踏まれてしかもその当人は踏んだ眼鏡のせいで靴が傷ついたつてんでさらに機嫌悪くなつて酒瓶は割るわその碎けたガラスのせいでテーブルに傷がつくわ俺の20万のブランド物のジッポはぶつ壊されるわ・・・20万だぜ？いやそんな高いもんじゃねえけどさ俺のだぜ？俺のジッポ。私物！！俺の自前の私物の20万のジッポだぜ？それをヒステリーの馬鹿女にいとも容易く壊された瞬間つてお前分かるかあーもーマジ死ねば良いのに。んでさらには店の装飾にまで文句つけた挙句に壁にまで酒撒いてヒステリックに喰き散らすしもーボロボロ。店もスタッフもやつてらんねえつつのあんババア！————！

はあはあと荒く息を繼ぐ雪妃の口はやはり据わつてゐる。あれだけ捲くし立てられた筈なのにその内容がしつかりと頭に入っているのは雪妃の迫力のせいか。それとも俺の聴力と集中力がすごいのか。一瞬考えたが後者はありえないと結論づける。すごいのは俺ではなく雪妃だろう。

そしてまだ延々と続く雪妃の回想と言ひ話の説明。正しく言えばただの愚痴。

その後の話を聞けば、雪妃はこの日の損害を全て弁償させ、しかもあわよくば店の売り上げアップに貢献せんばかりに好き勝手に暴れまくる美和を押さえつけ、宥めすかし、酒を注文させまくり飲ませまくり、見ろこれがノ。・ーのプライドだとでも言つよつて、最終的には泥酔させ酒豪のババアを潰してしまつた。

俺の記憶だとあの女は大五郎の4リットルを飲んでもけろりとしていたはずだが。（しかもその前にワイン一本とかなり度の強いウイスキーをストレートで飲み干してははずだ。）

そんなザルを超え、もはやワクのような女をどうやって泥酔させただろう。そしてどうやってそれだけの酒をあの女に入れさせ、飲ませられたのか。

その日美和が使つた金は優に500万を超えて、細かい金額は100万くらいといったかなー？と適当で、雪妃もよく覚えていらないらしい。

そしてさうにその後、美和を家まで送り届けた際に、若干自我を取り戻した美和に謝礼として50万ほどいただけたといつ。

そして店に帰つた雪妃は自分を褒めまくり讃えだす周囲を尻目にオーナーに泣きついた。

美和さんのあまりにもあんまりな振る舞いに流石に精神的に疲れてしまつたかもしれません。昨夜も実は俺徹夜でしたし、明日お店でお客様に素敵な時間をお過ごし頂く自信ないです・・・このままじゃ、俺、明日店に出られないかも・・・。オーナー、俺、どうしたら良いでしょう・・・。

と涙目ながらに訴えた。（もちろん旦薬。）

オーナーはうちに大事な雪ちゃんにそんな無体なことをせしられるわけないじゃないつ！！

お店のほうは大丈夫よ。なんとか開けられると思つわ。雪ちゃんがいなくても一日くらいだったら何とかなるから、ゆっくり休んで頂戴？ 今日はいっぱいお金貰つてくれたし、雪ちゃんだったら一週

間位休んだつて良いくらい。

じゃ、気をつけて帰つてね？▽

と素晴らしい快く休暇をくれたらしい。（ちなみにオーナーは48歳男性）

「雪乃は河原の夢だ」

雪妃は何処か儂げでクールで、そのたまに見せる笑顔が堪らないと店に来る女性全般に絶大な人気を誇っている。

店の窓はその仕草に見惚れ、声色に聞き入り、稀に見る」とのできる100万ドルの笑顔に卒倒するという。雪妃は今やこの街どころか東京で一番売れている最強のホスト、至上最高の夜王と言われている。

たが実際は、その仕草から声から笑顔から、実は全てが演技の嘘で、固められた接客なのだ。

今回の休みもその田頃の演技力をフルに使い得たものである。

そんな男が仕事中常備しているものは客を落とす為の口薬と、営業用の客を呼び出す為につかう携帯電話だ。（ちなみに雪妃は3台以上携帯電話を使い分けている。）

長つたらしい説明をし終え、ふう、と達成感に満ちた息を吐き雪妃はまたベットに潜り込む。少しはすつきりしたらしい。

「  
・  
・  
・  
詐欺師

「ううん、俺はホスト。

卷之三

「トトロの娘が森の雪姫を見たのでいいの野ののだから。」  
詐欺師としてたつてこの男は立派に食ひ入り、王族としての威儀も

とてもなく興味はあるが、この詐欺師まがいのホストがそんなへマをするはずないので下らない妄想は止めておく。

そして、やめとけや此ごとに俺はふと黙りこなした事を思つた

声に出してしまった。

声というのは一度外に開放してしまうと戻らない。

「…………雪妃つて死んでも成仏できなさそー。」

「…………えー何?俺の代わりに部屋の掃除してくれんの?うわー、炯君優しー。」

「…………は…………いや何言」

「あ、マジ?飯の買い物も行ってくれんの?嬉しー。」

「…………誰が行」

「あ、夕飯いらねえって?なんだ。休みだし美味しいもん作ろうと思つたのに。」

「…………。」

最初は疲れすぎて頭がイッたかと思つたが、

違う。

こいつ根本的に俺と会話する気が無い。そしてあわよくば俺をよく言つてお手伝い。悪く言えば雑用に使おうとしている。

嫌ならやらなきや良いだろ?がとお坊ちゃん精神が働くが、生憎俺は料理ができない。

そしてホストを辞めても詐欺師に転職できそうなこの男の料理は、意外にも料理人にでもなれるんじゃないかというほど美味かつた。普段忙しく、ほぼ出来合いのもので作った料理でもものすごく美味しいのに、まともに美味しい物を作ろうとして作つたら、雪妃の料理はどれだけ美味しいのか。

そして毛布の隙間から覗いている雪妃の目は、その視線だけで人を殺せるんじゃないかと思うくらいに怖かつた。

俺は16歳の育ち盛りの食い盛りでなので夕飯を食えないのは痛い。

あんな顔して雪妃はムカつくことに喧嘩も強い。あの路地裏で出会った日、俺の鳩尾に拳を決め気絶させたのも実は雪妃だ。

そして俺は嫌々とはいえ、甘やかされて育つたお坊ちゃんまで居候。世間知らずなわけではないと思うが、多分今は逆らわないほうが良いだろうと直感的に思う。  
昨夜の美和の事も、いくら今少し発散したからといって完全に気にしていないわけではないだろうし、多分機嫌もあまり良いとはいえないさそうだ。

「は-----。 . . . . 。

長い長い溜息を吐いて部屋から出る。雪妃のクスクスという癪に障る笑い声が聞こえた。

・・・畜生。

どうせ誰か拾ってくれるんならもつとまともな人間がよかつた。

そうは思つてもここから出て行く気は毛頭ないのだが。  
敵にしてしまえば恐ろしいが味方であればこんなに頼もしい人物は  
いないだろう。

せめて雪妃の機嫌をこれ以上悪化しないように、音を立てないよう  
に、神経をフルに使って静かに扉を閉める。

こんな俺の些細な気遣いが報われる日は来るのだろうか。

だけど、報われなくとも、でもまだ俺の家出は終わらない。

終われない。

## The true character (後書き)

雪妃様のジッポは STANLEY GUESS の限定 500 個生産の Large Wood Inland Nippo / Multi Wood Limited (ラージウッドインレイドジッポ / マルチウッド)

オンラインショップで見ていたらとても素敵だったので使わせていただきました。

まあ、壊されてしましましたが（「めんよ雪様）

正確には 225 - 750 円です。

雪様はシルバー アクセクロムハーツが好きだと良い。

CHROME HEARTS とか KING BABY とか。

シルバー アクセは詳しくないので情報怪しいですが。作者の調べ不足ということで勘弁してください。

次の話も、ギャグ主体の爛君弄られ話にしていきたいと思っていますので、もしよければお付き合いください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1038d/>

---

mad-dog

2010年10月10日00時55分発行